1 序にかえて——『源氏物語』の達成 表現と文体……………1

I

2 第一部の想像力の基底……………20

3 藤壺と「長恨歌」——引用による主題性の変容……………42

4 『源氏物語』における継子譚の形態分析——玉鬘物語の解析のために……………64

5 玉鬘十帖の興趣——方法的実験と内発的生成力……………98

II

6 草子地・語りについての一視角——作品形成における方法的意義……………120

 〈付論〉

 若菜巻の文体——方法としての挿入句……………145

7 夕霧巻の引用論的解析……………152

 ——反復・変奏の方法、あるいは「身にかふ」夕霧……………152

8 紫上終焉の方法——御法巻の表現構造……………185

III

9 引用表現と構造連関をめぐって——第三部の表現構造……………204

10 竹河巻官位攷——竹河論の序章として……………246

11 竹河巻と橋姫物語試論——竹河巻の構造的意義と表現方法……………269

12 浮舟登場の方法をめぐって——『源氏物語』の『源氏』取り……………311

13 類型への成熟——浮舟物語における宿命の認識と方法……………334

14 浮舟物語の方法——二つの挿話をめぐって……………361

15 手習巻物怪攷——浮舟物語の主題と構造……………383

*

16 『源氏物語』の言語状況——物語行為の喩としての、色好みのことば……………404

IV

17	『源氏物語』の水脈——浮舟物語と『かばねたづぬる三宮』	430
18	『源氏物語』の水脈——浮舟物語と『夜の寝覚』	465
19	『狭衣物語』の修辞機構と表現主体	490
20	文学的想像力の内なる『虫愛づる姫君』——もうひとりのかぐや姫	514
	初出一覧	533
	英文要旨	546

凡 例

- 一 源氏物語の引用本文は日本古典文学全集本（小学館）により、巻名・頁数を示した。
- 二 和歌の引用は、新編国歌大観によったが、時に漢字ひらがな表記は私に改めた。
- 三 源氏物語・和歌以外の作品や注釈書の引用は、そのつど明記した。
- 四 著者名等の敬称は、略した。
- 五 卷末に初出論文名と掲載書・誌の一覧を掲げた。

3 藤壺と「長恨歌」

— 引用による主題性の変容 —

一 はじめに

藤壺という存在が、光源氏の生涯を決定づけ、『源氏物語』第一部の世界を領導してゆく、長編構想の核であることは、よく説かれるところである。

たしかに、第一部の終幕を飾る源氏の栄耀のきわみ、太上天皇に准ぜられることは、源氏が冷泉帝のほんとうの父であるという秘事に支えられているのであり、さらにもとをたどれば、それは源氏と藤壺の密通にたどりつく。いわば、藤壺は、源氏の栄華を実現すべく用意された、源氏に犯され源氏の御子を産むための存在、そしてその御子が天皇位につくことで源氏を天皇の父たらしめるための存在であるといえる。つまり、藤壺なくしては、『源氏物語』第一部の骨格であり全体的枠組みでもある、〈源氏の栄華獲得の物語〉はありえないのであり、この意味でまさに藤壺は、源氏の人生の支柱、第一部を領導する源泉にちがいない。

そして、そうではあるがまた同時に、このことは、いかに藤壺が第一部の骨格の形成に重要不可欠な存在ではあっても、所詮〈源氏の栄華の物語〉という大枠、全体性につつまこまれ、それに奉仕する部分にすぎないということをも意味しよう。藤壺自身になう問題が光源氏になう主題と拮抗し、その大枠を変容させてしまふ、というようにはなっていないのである。『源氏物語』第一部は、一人の主人公を中心に形成される、『竹取物語』や『伊勢物語』の

ような古典的方法にのっとった世界なのであり、複数の人物達の関係によってくりだされる状況そのものが作品をうごかしてゆくような、状況そのものが主人公ともいえるような、そういう作品形成のあり方にはなっていない。

しかしまた、藤壺が第一部の世界形成にはたす役割は、〈源氏の栄華の物語〉という全体性、大枠への奉仕にまったくどまっている、というわけでもない。登場人物というものは、作品の中の現実を、すなわちある特定の人間関係や状況を、よりリアルに生かされれば生かされるだけ、作品全体を枠組む主題とは別に、その登場人物固有の問題をはらみこまされてゆく。それは、いわば、いずれ作品世界をつきうごかしてゆく力へと成長するかもしれない潜在的力、主題になる可能性をひめた主題性である。藤壺も、独自の状況の中で源氏との関係を生かされることによつて、〈光源氏の物語〉の主題とは別の、藤壺固有の主題性をつむぎはじめ。

『源氏物語』第二部の構造の特質と藤壺のかかわり方を、あらためて分析しなおすことからはじめ、さらには藤壺にあたえられた引用表現から、藤壺のつむぐ固有の主題性がどのようなものであったのかを考えてみたい。

二 第一部の構造と藤壺の役割

第一部の構造、骨組みは、源氏の人生に添うかたちで在る。そして、その源氏の人生は三つの予言に支えられている。ということは、つまり、第一部の構造も三つの予言に支えられていることになる。第一は、桐壺巻の高麗の相人の親相。

国の親となりて、帝王の上なき位くわいにのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。おはやけのかためとなりて、天の下を輔弼たすくる方にて見れば、またその相違さうなふべし。(桐壺 一一六頁)

第二は若紫巻、藤壺との密通直後の夢合わせ。